

・ブラック・ウェンズデー

読者の皆さんの中には、一九九二年九月一六日の「ブラック・ウェンズデー」というのをご記憶の向きがあるだろう。

一九二九年の「ブラック・サースデー」や一九八七年の「ブラック・マンデー」（いずれもニューヨーク株の大暴落日）に比べれば、「ブラック・ウェンズデー」は知名度がかなり低い。だが、そこには、為替戦争というものがいったん始まった時の猛威の凄まじさがよく表れている。

「ブラック・ウェンズデー」は、イギリス・ポンドが欧州通貨制度（EMS）の為替レート・メカニズム（ERM）からの離脱を余議なくされた日である。EMSは今のユーロ圏のいわば前身だ。ERMはEMS所属通貨間の為替レートを定める仕組みで、端的にいえば所属通貨間における固定為替相場制度だった。

この固定相場をイギリスは維持できなくなるに違いない。そう踏んだ**投機筋の凄まじいポンド売りがイギリスを襲った**。ちなみに、ポンド売りの急先鋒に立ったのが、かのジョージ・ソロスだった。

その勢いに敗北して、イギリスは結局のところポンドの切り下げに追い込まれた。まさしく、不本意ながらのやむなき自己防衛だった。

だが、それをきっかけにアイルランドが、イタリアが、スペインが、そしてポルトガルが次々と為替切り下げに踏み切らざるを得なくなった。

・モグラたち

モグラたちの顔触れをみておこう。大別すれば、九種類のモグラたちだ。**賃金モグラ、インフレモグラ、民主化モグラ、内需モグラ、流出モグラ、流入モグラ、恐慌モグラ、人民元モグラ、そしてやっぱり貧困モグラ**である。

・悪循環

経済が過熱している時には、熱冷ましのために金融を引き締めるのが正攻法だ。いうまでもない。**金融引き締め**の最も教科書的なやり方は**金利の引き上げ**だ。実際に、中国人民銀行も、この間、順次利上げを進めてきた。二〇一〇年一〇月から一一年四月までの間に四回の利上げを実施している。ほぼ二カ月に一度というのは、かなりのハイペースな金融引き締めである。それだけ、インフレ退治に躍起になっているということだ。

ところが、ここでまた話が厄介になる。金利を上げると何が起こるか。水は高いところから低いところに向かって流れるが、カネの動き方はその道だ。カネは、金利が低いところから高いところへ流れる。**中国が金利を上げれば、ただでさえ、中国へ中国へと引き寄せられている投機資金の流れがますます加速してしまう**。流入資金が増えれば、インフレもますます加速する。これでは、何のための金融引き締めか解らない。完全な悪循環である。

・成長、競争、分配

第一章でも既述の通り、これからの中国は経済活動の三角形の形を整えていく必要がある。その三辺を構成するのが、**成長と競争と分配**だった。今までの中国においては、成長以外の二つのベクトルが非常に貧弱だった。だが、頼みの綱だった成長のベクトルには、人口停滞とインフレ経済化という大きな制約要因がのしかかってきた。今こそ、競争と分配のベクトルの強化が急がれる。

・「中国とかけて〇〇経済と解く。その心は？」

解答その一は、「中国とかけて白鳥経済と解く」である。その心は、「水面上に出た姿は実に美しく迫力満点だが、水面下に目を転じれば、水かきが必死でフル稼働」。

まことに然りだ。中国経済の高度成長の快進撃は、久しく世界の羨望の的だ。オリンピックを開催すればその豪華絢爛ぶりで世界をあっと言わせる。中国のニュー・リッチ族の

購買力には飛ぶ鳥を落とす勢いがある。

・・・

だが、ひとたび水面下に潜って内情をみれば、これはなかなかどうして大変だ。一人っ子政策を徹底させ過ぎたせいで、少子高齢化が頭痛の種となっている。

・・・

そうした大問題が頭上にみえている中で、足元をみれば成長の飛ばし過ぎと世界的な余剰資金の流入でインフレが悩みの種。権利意識に目覚めた労働者の賃上げ要求も高まる一方だ。それを拒絶すれば社会不安が広がる。大衆消費社会の確立と次の成長基盤づくりの足場も崩れる。この辺りは第四章で取り上げた通りだ。これまでの快進撃を支えてきた経済モデルが場合によっては大崩壊する恐れが出てきている。この難局を何とか乗り越えようと、懸命に知恵を絞る、対策を打ち出し、計画を練っている。まことにとって白鳥経済である。

解答その二に進もう。「中国とかけて蕎麦屋の出前経済と解く」。その心はふたつある。その一は、「自転車が転倒して蕎麦が散乱するでしょう」。

・・・

中国経済蕎麦屋の出前論の心その二は、「いくら催促電話を入れても『もう出ました』と言うばかり」。

本当の実態が一向に見えてこない、透明性に欠ける蕎麦屋の内情に対して、鋭く疑念を呈する謎解きだ。

・・・

さて、ここでいよいよ、中国謎かけ名解答集の第九番目を発表しよう。前出の八答は、いずれも中国の現状に着眼した見立てであった。それに対して、解答その九は、中国がこれから目指すべき姿を提示した。すなわち、「中国とかけて『アイウエオ・キケコ・シスセソ経済』を目指すべしと解く」。その心は「カクサない」。

この場合の「カクサない」にはふたつの含意がある。その一が「格差ない」、そして、その二が「隠さない」である。この解答は相当に神業的だ。ビジネススクールで二～三年も勉強すれば、神の領域に到達するということである。皆さんも一度お試しになってはいかがだろうか。

それはともかく、「格差ない」と「隠さない」は、これからの中国にとってまことに大きな課題となっていくこと、間違いなしである。